

伝セネカ『オクタウィア』の独創性

宮 城 徳 也

Originality in Pseudo-Seneca's "Octavia" from the Viewpoint of Pietas

Tokuya MIYAGI

Abstract

"Octavia" is the only existing example of so-called 'fabula praetexta', a drama not based on Greek mythology and legend, but on Roman history. Octavia, the heroine of this tragedy, was an actual person in the first century Roman Empire. She was a daughter of the fourth emperor Claudius and was married with Nero who became the fifth emperor. She was later divorced by her husband who became a tyrant, which brought her dishonorable exile and death. Tacitus, a famous Roman historian, recorded these historical facts in detail in his "Annals" in detail. Using Tacitus' work as a reference, the author of "Octavia" (who was identified in several medieval manuscripts as Seneca the philosopher, even though this identification is denied by most modern scholars), wrote a tragedy in the typical form of Greek drama.

Although "Octavia" has originality compared to Greek tragedies and genuine Senecan tragedies, it is deeply influenced by Senecan tragedies. The theme of 'pietas', which encompasses both religious piety and filial piety and is one of the most important Roman virtues, is an essential factor in most of Senecan tragedies.

After examining the importance of 'pietas' in "Octavia" compared to genuine Senecan tragedies, the difference in the description of Octavia in "Octavia" compared to Octavia in Tacitus' "Annals", and the role of the chorus in "Octavia", it is concluded that the spiritual relief of Octavia through 'pietas' is intentional in the tragedy and it is the consequent spiritual relief that imparts the tragedy its originality.

はじめに

本稿は、完全に現存する唯一のプラエテクスタ劇⁽¹⁾で、哲学者セネカの名前で伝わる『オクタウィア』の中に、

1. セネカ劇に登場するピエタス⁽²⁾との比較
2. 歴史家タキトゥスの『年代記』⁽³⁾に描かれたオクタウィアとの比較
3. 合唱隊の立場

の3つの視点からピエタスに関わる「救いのヴィ

ジョン」を見ようとするものである。

1. セネカ劇と『オクタウィア』のピエタス

セネカの名で伝わる10作の悲劇の内、真作とされる8作と、現在は偽作と考えられることが多い『オエタ山上のヘルクレス』⁽⁴⁾は全て、ギリシア悲劇に原作を持つ翻案⁽⁵⁾であるが、家族間の葛藤を題材にしている作品が殆どなので、神を敬い、親族を愛し、共同体を支えるローマ的美徳ピエタスがそれぞれ作品において重要な位置を占めていると思われる。

附表の整理から想像されるように、セネカの真作

とされる悲劇群、また偽作とされることの多い『オエタ山上のヘルクレス』においては、宗教的背景を持った社会道徳であるピエタスが持つ、敬神、親族愛、人倫といった意味が過不足なく用いられていると言って良いだろう⁽⁶⁾。

この中で比較的ピエタスと言う語が多用されている『テュエステス』⁽⁷⁾においては、子どもを殺してその父親である自分の弟に食べさせるという人倫にも宗教にも反する行為が主題なので、その語の使用は皮肉な効果を狙ったものであると考えられ、『メデア』⁽⁸⁾では子どもを殺す母親の心の葛藤が、ピエタスが2行で3回用いられている箇所⁽⁹⁾に凝縮されており、出てくる回数は少ないけれども、『狂えるヘルクレス』⁽¹⁰⁾では、狂気の末に妻子を虐殺して昏倒した英雄が覚醒後に、自ら欲した自殺を断念する過程でピエタスが効果的に用いられている⁽¹¹⁾。

以前『狂えるヘルクレス』においてピエタスによる救済のヴィジョンを見ようと試みた⁽¹²⁾が、セネカ劇において殆どの場合、救済のヴィジョンは見出しにくいという見解が一般的であると思われる⁽¹³⁾。

以下で、『オクタウィア』においてピエタスと言う語が使われた箇所を整理してみた。10回と言う回数は『テュエステス』と同じで、他の作品では多くても『フェニキアの女たち』が7回、『メデア』が6回なので、回数で見ると、『オクタウィア』においてピエタスと言う語の重要度は高いと言えるだろう。

ローマ皇帝ネロは、義父クラウディウスの娘オクタウィアと愛のない結婚生活を送っていた⁽¹⁴⁾が、ポッパエア⁽¹⁵⁾を愛人として、妻を追放しようとしている。先帝の娘への敬慕の念から、民衆が起こした暴動⁽¹⁶⁾のために却って、オクタウィアは命も奪われる状況に陥る。神への敬意も親族への愛情もないがしろにするネロの行為を、息子に殺された母アグリッピナの亡霊が後押しする⁽¹⁷⁾。こうした粗筋の悲劇にアイロニカルな意味でピエタスと言う語が用いられるのは、『テュエステス』の場合と同様である⁽¹⁸⁾。

実際に、ネロの描かれ方は『テュエステス』のアトレウスによく似ていて⁽¹⁹⁾、意識的な模倣とも考えられる⁽²⁰⁾。また、アグリッピナの亡霊が息子に非道を敢行させ、その死を予言する際に、自らが毒殺したクラウディウスの亡霊に悩まされる様⁽²¹⁾

は、『メデア』で弟アプシュルトウスの霊に駆り立てられて⁽²²⁾、子殺しへと進む母親の姿を想起させる。従って、『オクタウィア』にピエタスと言う語がまとまって使われ、重要な意味を持つてくることは決して理由のないことではないであろう。

『オクタウィア』において、ピエタスと言う語がどのように使われているかを検討してみる。

(1) (乳母)

animus dolentis nostra solatur fides
pietasque frustra:

わたしたちは、苦しんでおられるオクタウィアさまの心を、信義と愛で、
お慰めしようとするのですが、それも実らず、
(51-52)⁽²³⁾

この台詞で、乳母は、弟を殺した夫に対して怒りと復讐心を抱いているオクタウィアを、「信義と愛(ピエタス)」で慰めようとしている。ここではピエタスは親子の愛でも宗教心でもないが、人間愛を意味する⁽²⁴⁾ことに注目したい。

(2) (オクタウィア)

scelus ulcisci uindice fratre,
tua quem pietas hosti rapuit
texitque fides:

弟君(オレステス)を復讐者として、悪行の報復を行なうこともできた、
弟君をあなたの愛で敵の手から取り戻し、
あなたの誠で守り通して。(62-64)

この台詞は、この劇では「歌」として用いられる短長二歩格⁽²⁵⁾で書かれている。この箇所は重要であろう。ここでも「信義」(フィデス)⁽²⁶⁾と組み合わせられているが、「愛と信義(誠)」で弟オレステスを敵から救い、保護したのはエレクトラ⁽²⁷⁾で、弟とともに父の仇を討った彼女への自己投影は復讐の意志を暗示しているからである。成功したエレクトラを羨み、自分の不幸を嘆いて、弟の殺害に涙することもできないと言う台詞は、後述するタキトゥスの記述を思わせる⁽²⁸⁾。

(3) (乳母)

tunc sancta Pietas extulit trepidos gradus
uacuumque Erinys saeva funesto pede
intrauit aulam,

その時、聖なる敬愛の女神ピエタスは震える足を
踏み出し、
残忍なる復讐の女神エリニユスが不吉な足で、空
虚な
宮廷に踏み入り、(160-162)

これに関しては、これに続く部分と関連させなが
ら、後で考察する。ピエタスが女神の固有名詞とし
て使われていると考えられることが重要である。

(4) (合唱隊)

sancta quid illi prodest pietas
diuusque pater?
quid uirginitas castusque pudor?
奥方の清らかな愛情と、
神とられた父上が
純潔と汚れなき恥じらいが役立つのでしょうか
(285-287)

合唱隊⁽²⁹⁾は、皇帝夫妻の離婚の噂にその不当
性を訴えながら、ピエタスは有効なのかと問う。こ
こでは、「神とられた父上」と言う句から、
その持主はオクタウィアで、その内容は「純潔」、
「汚れなき恥じらい」であると付言され、後に言及
する「暴君である愛の神」と同一視されるネロとの
対照が強調されている。「清らかな」と訳されてい
る形容詞は「神聖な」をも意味し⁽³⁰⁾、もともと
ピエタス宗教性を帯びていることを示している。

(5) (ネロ)

armis fideque militis tutus fuit,
pietate nati factus eximia deus,
post fata consecratus et templis datus.
兵士の軍備と忠誠心のおかげで身の安全と保ち、
子息の並外れた孝心により、死後、
神として崇められ神殿に祀られておられる。
(526-528)

ネロの台詞でも「信義 (= 忠誠心)」が近傍に用
いられ、ここでは兵士の「忠誠心」と、養子ティベ
リウスが先代のアウグストゥスを神として祀ったこ

とが言及されている。この場合、ピエタスは敬神と
親族愛を兼ねていることになる。

(6) (セネカ)

Vix sustinere possit hos thalamos dolor
uidere populi, sancta nec pietas sinat.
国民は嘆き悲しみ、このような結婚を見るにたえ
ないで
ありましょし、気高い尊敬の念はそれを許しは
しないでしょう。

離婚を敢行し、愛人と再婚しようとするネロを諫
めて、セネカが、そのような婚礼を国民も見ること
が耐えられないし、「神聖なピエタス」(=気高い尊
敬の念)もそれを許さないとやっている。この場合
のピエタスは夫婦の絆を含む人倫という意味である
が、国民への言及から共同体を支える徳義であり、
「神聖な」という形容詞を付されているところから
察せられるように、やはりその根本に宗教性が前提
とされている。

(7) (合唱隊)

En illuxit suspecta diu
fama totiens iactata dies:
cessit thalamis Claudia diri
pulsa Neronis,
quos iam uictrix Poppaea tenet,
cessat pietas dum nostra graui
compressa metu segnisque dolor.
ああ、ついに、長い間予感された日、
何度も噂になった日が明けてきました。
クラウディウスの娘御は、残酷なネロの
部屋から追放され、
ポッパエアが、すでに、勝利者となってそこに君
臨しています、
一方、われらの愛は重苦しい恐怖に押しつぶされ
てままならず、
悲しみの気持ちも、鈍く、麻痺したまま。(669-
675)

オクタウィアが離婚され、ポッパエアが皇后とな
る知らせに対して、何もできないでいるので、重苦
しい恐怖に圧迫された自分たち (= 合唱隊) のピエ
タス (= 愛) の力の無力を嘆いている。この場合の

ピエタスは、歴代の皇帝への敬愛と忠誠心がオクタウィアへの親愛の情となったものと考えられる。その後、外敵を打ち破り、秩序と平和を築き上げたローマ国民の力⁽³¹⁾はどこへ行ったのかと嘆いているが、ここに合唱隊の現状への不満と過去の理想化が読み取れる。

(8) (ネロ)

Sed adesse cerno rara quem pietas uirum
fidesque castris nota praeposuit meis.

だが、あそこにやってくるのが見えるのは、稀なる忠誠心と名高い信義でわたしの軍隊の指揮官となった男ではないか。(844-845)

ここで、ネロは、ポッパエアとの再婚に反対したローマの民衆蜂起を鎮圧した将校⁽³²⁾に関してピエタスと言う表現を用いており、ここでも「信義」(フィデス)とともに用いられていて、二詞一意⁽³³⁾的な用法として、木村が訳したように軍人の忠誠心を意味しているであろう。

(9) (合唱隊)

O funestus multis populi
dirusque fauor,
qui cum flatu uela secundo
ratis impleuit uexitque procul,
languidus idem deserit alto
saeuoque mari.
Fleuit Gracchos miseranda parens,
perdidit ingens quos plebis amor
nimiusque fauor,
genere illustres, pietate fide
lingua claros, pectore fortes,
legibus acres.

ああ、衆望を集めたがゆえに恐るべき死を招いた人の数のおびただしさ、声望は船の帆を順風で膨らまして沖へと運びはするが、それが、凋落すると、沖合いの荒海に船を見捨ててしまう。グラックス兄弟がかわいそうに母親を泣かせ、命を落としたのも、もとはといえば、民衆の大きな愛、度を過ぎた支持。家柄に傑出し、

忠誠、信義、雄弁にかけて名高く、心は雄々しく、法を守ることにかけては俊敏な兄弟であった。(877-886)

民衆に人気があったがために、その離婚に反対する暴動が起き、そのためにかえって流罪の上に処刑されることになったオクタウィアの運命を嘆き、やはり民衆の人気ゆえに身を滅ぼしたグラックス兄弟⁽³⁴⁾に喩え、彼らはピエタス(=忠誠)と信義その他に傑出した人物だったと述べている。

以上、見てきたように、語としてははっきりと出てくるピエタスのうち、親族愛に限定されるものは少なく、親族愛を含むより普遍的な道徳に近い意味で使われている方が多いように思える。この点は、たとえば

(10) (オクタウィア)

nullum Pietas nunc numen habet
nec sunt superi:

regnat mundo tristis Erinys.

敬虔の神ピエタスはもう神としていかなる力ももたず

天の神々はおられない。

この地上に君臨するのは、陰鬱な復讐の女神エリニウス。(911-913)

保留した(3)とともに、この箇所を検討する。注目すべきは、合わせて2か所現れる、敬神と親族愛の女神ピエタスと復讐の女神エリニウスの対象である。(3)はプロロゴス⁽³⁵⁾における乳母の台詞だが、最後に追放刑に処されて、兵士に引かれて行くオクタウィアが語る(10)にも、この対立が明示されている。(10)の直前の台詞は親族名称を使い、ピエタスの無力を強調している。

fratris cerno miseranda ratem.

hac est cuius uecta carina

quondam genetrix, nunc et thalamis

expulsa soror miseranda uehar.

哀れな私には兄(ネロ)が用意した船が見える。

かつては母親(アグリッピナ)が、

今は寢室を追われた哀れな

妹である私が運ばれていく船が。(908-911)⁽³⁶⁾

ここには息子による母殺し、兄による妹への迫害、夫による妻の追放と処刑と言うインピエタス⁽³⁷⁾の行為が凝縮されている。

(3)の周辺箇所でも、アグリッピナが乗り込んできた宮廷で行われた、アグリッピナによる夫殺し、ネロによるブリタニクスの暗殺が列挙されている。

また、アグリッピナとエリニユスの同一化がポッパエアの夢の中に見られる(721)。ここでアグリッピナを指す「夫の母」(coniugis genetrix)と言う句は、ことさらに親族名称を使い、ピエタスのアイロニーを際立させている。この同一化は、プロロゴスのオクタウィアの台詞でも言及されている。

tulimus saeuae iussa nouercae,
hostilem animum uultusque truces.
illa, illa meis tristis Erinys
thalamis Stygios praetulit ignes
teque extinxit, miserande pater,
わたしは残忍な継母の言いつけと敵意と
恐ろしい顔つきに耐えてきました。
あの不吉な復讐の女神エリニユスが、わたしの
婚礼に冥界の火を松明として差出し、
哀れなお父さま、あなたを亡き者にしてしまいました。(21-25)

直接の同定はなされていないが、クラウディウスを殺したのはアグリッピナなので⁽³⁸⁾、連想があるのは間違いないと思われる。アグリッピナの亡霊の台詞にも注目したい。

Tellure rupta Tartaro gressum extuli,
Stygiam cruenta praeferens dextra facem
thalamis scelestis: nubat his flammis meo
Poppaea nato iuncta, quas uindex manus
dolorque matris uertet ad tristes rogos.
manet inter umbras impiae caedis mihi
semper memoria, manibus nostris grauis
adhuc inultis.

大地を割って、冥界から、わたしは歩み出てきました、
血みどろの手に、この罪深き婚礼のため、冥界の
松明を持って、
この炎に照らされて、ポッパエアはわが息子と結

ばれ、
結婚するがよい。母の恨みと復讐の手が、この炎を
すぐに悲しみの火葬の薪に点火することだろうから。
非道な殺害の記憶は、冥界の亡霊の間にあっても、
永遠にわたしから薄れず、未だに復讐の成らぬわ
が魂魄に
重くのしかかっている。(593-600)

この作品において、ネロをめぐるピエタスとエリニユスの対比があるとすれば、エリニユスの側にいる人物がポッパエアであるのに対し、一方にはオクタウィアが対置されているのは容易に想像される。しかし、オクタウィアにも復讐の意志があることは、プロロゴスにおいてエレクトラによびかける所から察せられる。そこでは自分に比してエレクトラが父の死を嘆くことができたこと、自分が弟を奪われたのに対し、「復讐者」としてオレステスを守り抜いて、復讐を成就できたことに言及している。さらに、自分の唯一の救いは「死」⁽³⁹⁾であるとしながら、

trepidante semper corde non mortis metu,
sed sceleris
心がたえず乱れるのは、死を恐れるためではなくて
罪を恐れるため。(106-107)

と語って、恐れているのは「死」ではなく、「罪」⁽⁴⁰⁾と言っている。ここでの「罪」は生きていることによって、夫殺しの大罪を犯すことになると言っているものと推測される。

オクタウィアにはこれと言った罪に関する言及の無いクラウディウスと若くして殺されたブリタニクスを除けば、主要人物中では例外的にピエタスという徳目に忠実な人物と言える。唯一ピエタスに背く面があると敢えて言うなら、夫および継母(従姉でもある)との関係であろう。

Extinguat et me, ne manu nostra cadat!
わたしの手で殺されぬよう、あの方は、わたしも
亡き者にするがいい!(174)

utinam nefandi principis dirum caput
obruere flammis caelitum rector parat,
忌まわしい皇帝の恐ろしい顔を、

天界の支配者が火炎で埋め尽くしてくださればよいのだが！ (227-228)

と、ネロへの復讐の可能性を隠していない。しかし、ネロが彼女に憎まれる原因はネロのインピエタスにあり、彼は「神々の敵」であり、「神殿から神々を」、「祖国から市民を」追放して、「弟の命を奪い」、「母の血を飲み干した」「非道の君主」(dux impius) (237) と言われている。

これらの箇所のイメージを繋ぐのは「婚礼」と「冥界の松明」である。プロロゴスではオクタウィアの婚礼にも、松明とともにエリニウスが現れ、不幸(＝クラウディウスの死)を齎したとされている。

冥界から来たエリニウスがメッサリナの狂気の婚礼⁽⁴¹⁾に破滅を齎し、アグリッピナの亡霊がポッパエアの婚礼の不吉な結末を予言する。婚礼の松明は怒りの炎となって復讐を呼び、これは『メデア』に現れる「怒り」とピエタスの関係を想起させる。婚礼の松明と破滅の炎のメタファーである。

実際にアグリッピナの亡霊が、夫クラウディウスの亡霊にせきたてられて、息子に破滅への道を促す役割を果たす場面⁽⁴²⁾で、読者もしくは観客は、メデアが自ら殺したアプシュルトウスの亡霊にせきたてられて、子殺しを敢行する場面を思い出すであろう。

アグリッピナが夫の亡霊をなだめようと言った、次の台詞は重要である。

ultrix Erinys impio dignum parat
letum tyranno, uerbera et turpem fugam
poenasque quis et Tantali uincat sitim,
dirum laborem Sisyphi, Tityi alitem
Ixionisque membra rapientem rotam.

復讐の女神が邪悪な暴君にふさわしい死を用意しています。それに鞭打ちと恥ずべき逃走とその他の罰も。タンタルスの喉の渇きにも、シシュプスの恐ろしい仕事にも、ティテュオスの肝を食らう秃鷹にも、イクシオンの体を回転させる車にもまさる罰を。(619-623)

「復讐の女神が非道の暴君にふさわしい死を用意している」という句は、スエトニウスの「ネロ伝」にある「鞭打ち」⁽⁴³⁾を含む罰が列挙されているこ

とから、ペトラルカ、サルターティ以来、『オクタウィア』がネロの死の68年以後の作品と言う有力な根拠の一つとされる。

しかし、ここでは続く、『テュエステス』のタンタルスの亡霊によるプロロゴスを想起させる句に注目する。先程の『メデア』同様、『テュエステス』への連想によって、タンタルスが蒙っている地獄の劫罰が、食人という非道に関連した関連した、タンタルスの孫であるアトレウス、テュエステス兄弟、特に食人をさせた側のアトレウスの破滅と死後の報いを思わせる。

ここに見られる類似は、タンタルスが『オクタウィア』のアグリッピナ同様、子孫の破滅を促す役を果たしている⁽⁴⁴⁾ばかりではなく、タンタルスやアグリッピナが冥界で苦しんでいるように、アトレウス、テュエステス兄弟同様に、ネロが破滅して地獄の劫罰を受ける様が想起される。

セネカがネロに仁慈と妻への愛を説く場面⁽⁴⁵⁾は、『テュエステス』において、アトレウスの非道を従者が思いとどませようとする場面に似ている。ここでは両者とも理性的立場は説得に失敗するか、それによって、

Stulte uerebor, ipse cum faciam, deos.

自ら神を造ったこのわたしだ、神々を畏れるとすれば馬鹿な話だろう。(449)

と言うネロの台詞に見られる狂気と思い上がり⁽⁴⁶⁾を浮き彫りにし、

spernit superos hominesque simul
神々を人をも侮蔑している (90)

と言うオクタウィアの台詞に見られる、ネロの実態を証明する。

『テュエステス』や『メデア』同様に、セネカの悲劇ではピエタスと言う語が何度か使われるのは前述の通りで、『オクタウィア』も同様である。こうした内容の作品であれば、当然のことだが、『オクタウィア』においては女神ピエタスと復讐の女神エリニウスの対置に見られるように、ピエタスやインピエタスのモチーフを効果的に使いながら、エリニウス(複数ではエリニウス)の支配する世界を時間的、空間的に超えた所に、正義が実現する、ピ

エタスの勝利のヴィジョンを読み取りたい。

セネカの作品では、「復讐」は実現（『アガメムノン』、『メデア』、『テュエステス』）し、そこには何の救いも無い剥き出しの悪と悪の対立だけが見られ、まさにエリニユスの勝利する世界が実現する。しかし、『オクタウィア』の作品中では、「復讐」は実現しない。ネロがセネカに対し、オクタウィアとの離婚を「復讐」と位置付ける箇所⁽⁴⁷⁾はあるが、大筋から見るとエリニユスの勝利とは言えないであろう。

2. タキトゥス『年代記』の記述と『オクタウィア』

この作品の主人公オクタウィアに関して、タキトゥスはどのように言っているであろうか。

uxore ab Octavia, nobili quidem et probitatis spectatae, fato quodam, an quia praevalent illicita, abhorrebat, metuebaturque

「その頃ネロは、どういう宿命なのか、あるいは不正のものがさらに魅力を持ったためであろうか、妻のオクタウィアを、彼女の高貴な生れと万人の認める貞淑にかかわらず、嫌悪して遠ざけていたのである」（『年代記』13.12）

とあり、これは『オクタウィア』の合唱隊の考えと一致する。しかも、この前後でタキトゥスは、ネロがアクテと言う解放奴隷の女性を愛人にしていたことに言及し、他の上流階級の女性が、彼の情欲（libido）の犠牲とならないための必要悪として周囲は認めていとするが、次章ではこの愛人関係が母アグリッピナの怒りを買ひ、母子の間に亀裂を入れる原因となったことを報告している。また、ブリタニクス毒殺を受けて、

Octavia quoque, quamvis rudibus annis, dolorem caritatem omnes adfectus abscondere didicerat.

「オクタウィアはまだ若かったのに、苦悩と愛情とかその他いっさいの感情を隠す術を学び取っていた。」（同13.16）

と言われるのは、『オクタウィア』においては主人公自身の台詞と一致する。タキトゥスの報告は一層悲惨で、ブリタニクス毒殺の食卓に同席していたア

グリッピナが「恐怖と心の動揺」を表したのに、かろうじて取り繕ったことに比して、オクタウィアの冷静さを描写し、さらに「しばらく沈黙があって後、宴会はもとのように賑やかになった」（ita post breve silentium repetita convivii laetitia）と付け加えている。また、

posito metu nuptias Poppaeae ob eius modi terrores dilatas maturare parat Octaviamque coniugem amoliri, quamvis modeste ageret, nomine patris et studiis populi gravem.

「さて、ネロは恐怖の原因を取り除いてしまうと、このような不安のため、それまで延ばしていたポッパエアとの結婚を急ぐことにする。妻のオクタウィアは貞節な女ではあるが、父の名と国民の人気のためにけむった存在である。まずこれを離縁しなくてはならぬと彼は思う。」（同14.59）

と言う記述は、『オクタウィア』では登場人物としてのネロの台詞に対応している。この前に数章でセネカの引退や、ネロにとって脅威となる有力者の非合法な排除が行なわれ、こうした抑制や恐怖が取り除かれた状況で、歴史上のネロは暴君の道をまっしぐらに進んでいた。

さらに、14巻の60-61章には、「オクタウィアとの離婚、ポッパエアとの結婚、民衆の非難」、「オクタウィアを再び妻にという噂」、「民衆の示威運動」の流れが語られ、61章ではさらに、民衆が歓喜してポッパエアの像をひきたおし、ポッパエアがネロに鎮圧を嘆願する場面が描かれている。62-63章では、オクタウィアに「姦通の罪」が着せられ、彼女は「流刑」に処される。「姦通」は『オクタウィア』では言及されていない⁽⁴⁸⁾が、一連の流れは良く似ている。タキトゥスの記述によれば、アグリッピナ殺害の実行犯と、オクタウィアの偽りの姦通相手は同じアニケトゥスという人物であった。これももちろん『オクタウィア』には言及がない。

63章の次の文は、やはり『オクタウィア』と共通している。

huic primum nuptiarum dies loco funeris fuit, deductae in domum, in qua nihil nisi luctuosum haberet, erepto per venenum patre et statim fratre;

tum ancilla domina validior et Poppaea non nisi in
perniciem uxoris nupta; postremo crimen omni exitio
gravius.

「オクタウィアにとっては、そもそも結婚式の日
からして葬式であった。彼女は悲しみのほかには何
も思い出せなかった筈の家に嫁ぐ。まず父を、すぐ
その後で弟を、毒殺によって奪われる。ついで主人
の彼女よりも下女がネロに寵愛される。ポッパエア
は、この正妻をなきものにして初めて結婚できた。
あげくの果てが死よりもむごたらしい弾劾の布告で
ある」

また次の一節は22歳のオクタウィアの最後の場
面で、彼女自身の言葉とされている。

「私はもう元首の妻ではない、妹にすぎない」

cum iam viduam se et tantam sororem testator
(14.64)

これは『オクタウィア』における主人公の台詞、

Soror Augusti, non uxor ero.

私は皇帝の妹であっても、妻ではなくなります。
(658)

を想起させる。

タキトゥスにおける、オクタウィアの死の描写
(49) は、残忍なもので、鋼で縛られ、四肢の血管
を切り開かれるが、恐怖で血が流れず、発汗室で窒
息死したとされる。さらに首はポッパエアのもとに
送られたとされる。『オクタウィア』において、オ
クタウィアの貞淑でつつましい性格は、タキトゥス
の記述と共通しているが、彼女の死は、悲劇では予
告的に言及されるだけで、悲惨に物語られているタ
キトゥスの記述とは一線を画している。

タキトゥス『年代記』との時間的前後、影響関係
は不明⁽⁵⁰⁾だが、少なくとも『オクタウィア』の
作者が、「正義の実現」、「肉親の情」によって⁽⁵¹⁾
復讐を心では望んだとしても、それを実行に移すこ
となく、抑制的にふるまい、自らの罪ではなく、夫
の不実と国民の人気と言う外的要因によって不幸に
陥った立派な女性として、好意的に描いていること
は間違いなであろう。

なお、タキトゥスの『年代記』14巻でオクタウィ

アの離婚、追放、処刑を報告した後、15巻で、有
名な「ローマ大火」と「セネカの死」が記述される。
16巻は後半部分が欠損しており、ネロ自身の失脚
と死は、スエトニウスの「ネロ伝」、カッシウス・
ディオの『ローマ史』によって知られる。

3. 合唱隊の立場

ここで、合唱隊に見られる基本思想を考察したい。

Vera priorum uirtus quondam
Romana fuit uerumque genus
Martis in illis sanguisque uiris.
Illi reges hac expulerunt
urbe superbos
ultique tuos sunt bene manes,
uirgo dextra caesa parentis,
ne seruitium paterere graue et
improba ferret praemia uictrix
dira libido.
Te quoque bellum triste secutum est,
mactata tua, miseranda, manu,
nata Lucreti,
stuprum saeui passa tyranni.
dedit infandi sceleris poenas
cum Tarquinio Tullia coniunx,
quae per caesi membra parentis
egit saeuos impia currus
laceroque seni uiolenta rogos
nata negauit.

かつての祖先のローマの徳は／まごうかたなく本
物で、人々には／軍神マルスの血筋と本物の家柄が
ありました。／かの人々はこの都から傲慢な王を追
放し、／また、あなたの霊の復讐も立派に果たされ
ました、／ウィルギニア、父の手で命を召された方、
／それはあなたがつらい奴隷の身となり、／勝ち
誇った恐ろしい情欲の非道な獲物と／ならぬよう
にするため。／そして、ルクレティア、あなたがも
ので悲惨な戦いが続きました、／おかわいそうに、わ
れとわが手で命を断たれた／ルクレティウスの娘、
／残忍な暴君タルクイニウスに辱めを受けたがため
に。／この忌まわしい罪の罰をうけたのは／タルク
イニウスのみならず、その妻トゥリアも。／トゥリ
アは、殺された実の父の遺体の上を／親不孝にも残
忍な車を走らせ／ずたずたになった老いたる父に火

葬の礼を／拒否した激しい娘。(291-308)

合唱隊もまた、オクタウィア同様に、ピエタスによる正義が実現しないことに諦念を抱いているように見えるが、その中で、上に引用した第1合唱隊歌には、僅かながら「復讐」による正義の実現というヴィジョンが見られる。「父の手で殺された乙女」はウィルギニアであり、その霊に対して復讐が果たされたと言うのは、権力者の失脚と死⁽⁵²⁾である。ルクレティアは暴君タルクイニウス王の息子に暴行を受けて自殺し、民衆の怒りを買った王は追放された。

暴君の妻トゥリアもまた親殺しの大罪を犯したとされる⁽⁵³⁾が、彼女もまた追放された。「暴君」と「親殺し」はネロを指しており、ここには彼の追放も暗示されている。第1合唱隊歌の後半は、ネロによる母殺しの描写となり、さらに殺されたアグリッピナの亡霊が劇中に登場し、ネロの死を予言(619, 629-30)する。ここに「正義の実現」に拠る一種の救いのヴィジョンを読み取りたい。

先に言及したように、そこに「復讐の女神」が用意しているのは、冥界での劫罰であり、実際にはオクタウィアは悲惨な死を遂げ、セネカも死を命じられ⁽⁵⁴⁾、ポッパエアはネロが原因で事故死する。ネロの死はこの後で、それ以前に死んだ人々から見て、正義の実現に拠る救済とは言い難い。

合唱隊もポッパエアの美を讃える第4合唱隊歌⁽⁵⁵⁾に見られる、グラックス兄弟とリウィウス・ドゥルスス⁽⁵⁶⁾の先例、また嘆きのオクタウィアに対して示す女性たちの例も、救いがあるとは思われず、そこに見られるのは、セネカ劇における常套的な「運の変転」⁽⁵⁷⁾に対する諦念である。

それでも、史実の上では悲惨な最期を余儀なくされた主人公の、毅然とした台詞で締めくくられる最終場面を備えた『オクタウィア』の読後感が、重苦しいだけではないのはどうしてかと考える時、自らを復讐者エレクトラにオクタウィアを、犠牲者イピゲニアに喩えて、彼女を遠い世界に連れて行ってくれるように祈る「西風へのオード」があるからだと思われる。

Lenes aurae zephyrique leues,
tectam quondam nube aetheria
qui uexistis raptam saeuae

uirginis aris Iphigeniam,
hanc quoque tristi procul a poena
portate, precor, templa ad Triuiaie.
Urbe est nostra mitior Aulis
et Taurorum barbara tellus:
hospitis illic caede litatur
numen superum;
ciuis gaudet Roma cruore.

そよふく風よ、軽やかな西風よ、／かつて情け知らずの処女神ディアナの祭壇から／イピゲニアを空の雲の包んで／運び去ったおまえたち、／この方も、悲惨な罰を受けぬ遠いところへ／運んでおくれ、お願いです、ディアナの杜まで。／わたしたちの都に比べれば、アウリスも／タウリ人の野蛮な土地も、穏やかなもの。／神々に捧げられるけれど、／ローマは市民の血を喜々として受け入れているのですから。(973-983)

堂々として死を待つオクタウィアの姿もまた、それを補完している。プロロゴスではオクタウィアの婚礼にも、エリニウスが松明とともに現れ、不幸を運んできたとされる。冥界から来たエリニウスが、メッサリナの狂気の婚礼に破滅を齎し、アグリッピナの亡霊が、ポッパエアの婚礼の不幸な結末を予言する⁽⁵⁸⁾。婚礼の松明は、怒りの炎となって復讐を呼び、これは『メデア』に現れる怒りとピエタスの関係を想起させる。婚礼の松明は破滅の炎のメタファーであると言えよう。

『オクタウィア』と『オエタ山上のヘルクレス』の類似は夙に指摘されている⁽⁵⁹⁾。「妻—夫—愛人」と言う人間関係の基本的同一性を考えると、それは容易に推察される。しかし、この関係は『メデア』においても同じである。アエギストゥスと言う妻の愛人が要素として増える『アガメムノン』よりも似た構造と言える。

前述のように、実際にアグリッピナの亡霊が、夫クラウディウスの亡霊にせきたてられて、息子の破滅を促す役割を果たす場面で、読者、観客は、メデアが自ら殺した弟アブシュルトゥスの亡霊にせきたてられて、子殺しを敢行する場面を思い起こすだろう。

非道の契機とはなっていないが、オクタウィアの台詞にもブリタニクスの亡霊が現れる(119)。ここで、オクタウィアは弟ともどもネロに刺し貫かれ

る悪夢を見ているが、これは後半で、ポッパエアの夢にアグリッピナが現れるのに対応する (722)。しかも、この悪夢では「残忍な顔つき」で、「血まみれの松明」を振り回す亡霊で、不幸の契機になっており、「復讐の女神」の姿をしたアグリッピナの亡霊がその役割を果たすことになる。婚礼の床に前夫クリスピヌスが現れ、彼女を抱きしめた所にネロが剣を喉元に突き立てる。

この作品では史実にましてインピエタスの権化であるネロの破滅を内包していることで、正義の実現が暗示されているように思われる。ネロとの対話部

分に先立つセネカの独白における宇宙の崩壊と再生はそのヴィジョンを補っているように思われる。

付記：テキストは基本的に、

Otto Zwierlein. L. Annaei Senecae Tragoediae. Oxford University Press, 1986

に従っているが、適宜その他のテキストも参照している。

固有名詞の表記は原則として音引きを使わないエラスムス式のラテン語発音に従っているが、慣用を優先した場合もある。

附表：セネカ劇のピエタス (HF:『狂えるヘルクレス』/Tr.:『トロイアの女たち』/Phn.:『フェニキアの女たち』/Med.:『メデア』/Phd.:『パエドラ』/Oed.:『オエディプス』/Ag.:『アガメムノン』/Th.:『テュエステス』/HO.:『オエタ山上のヘルクレス』)

作品	行数	語形	話者と主要な意味
HF	1094	pietas	合唱隊. 昏倒している英雄に uirtus pietasque が戻るように祈願. 敬神と親族愛
	1269	pietas	ヘルクレス. 父の子への愛
Tr.	581	pietas	ウリクセス. 母の愛⇔強制 (必然)
Phn.	97	pietatem	オエディプス. 娘の父への孝心
	261	pietas	オエディプス. 親孝行
	310	pietatem	オエディプス. 孝心
	381	pietate	イオカスタ. 母の愛
	455	pietas	イオカスタ. 孝心
	536	pietatem	イオカスタ. 孝心
	585	pietati	イオカスタ. 敬神, 孝心, 祖国愛
Med.	438	pietas	イアソン. 父の子への愛
	545	pietas	イアソン. 父の子への愛
	905	pietas	メデア. 広義の人道
	943	pietatem	メデア. 母の愛, 「怒り」と葛藤
	944	pietas	同上
	同	pietati	同上
Phd.	631	pietate	ヒッポリュトウス. 家族愛
	903	Pietas(voc.)	テセウス. 女神ピエタスへの呼びかけ. 息子の「罪」を嘆く
	921	pietas	テセウス. 広義の人道. 息子の「うわべの立派さ」の虚偽性を非難

Oed.	19	Pietas(voc.)	オエディプス. 父殺しと近親相姦の予言があったことへの嘆き
	796	pietas	オエディプス. 母への愛
Ag.	112	pietas	クリュテメストラ. 広義の人道 (含意としては夫婦愛も含まれる)
	957	pietatem	エレクトラ. 親族愛を中心とする人道
Th.	216	pietas	従者. 広義の人道
	217	pietas	アトレウス. 広義の人道
	248	pietas	従者. 親族愛
	249	Pietas(voc.)	アトレウス. 親族愛の女神
	474	pietas	テュエステスの息子タンタルス. 親族愛
	510	pietas	アトレウス. 親族愛
	515	pietas	テュエステス. 親族愛
	549	pietate	合唱隊. 広義の人道
	559	Pietas	合唱隊. 女神ピエタス
	717	pietatem	知らせの者. 親族愛 (祖先への敬意)
HO	984	pietas	ディアニラ. 孝心
	986	pietas	同上
	1027	pietas(voc.)	ヒュルス. 孝心

注

- (1) ローマの高官が着用した「トガ・プラエテクスタ」(緋色の縁取りのある長衣)に名称の由来を持ち、3世紀の作家ナエウィウスが創始したとされるローマ史劇. A. J. Boyle, ed., *Octavia Attributed to Seneca*, New York: Oxford University Press, 2008, xlii-lvii. Lucile Yow Whitman, *The Octavia: Introduction, Text, and Commentary*, Bern und Stuttgart: Verlag Paul Haupt, 1978, 5
- (2) 敬神と親族愛を兼ね備えたローマ的美徳で、セネカ劇だけではなく多くのローマ文学作品で、主題の一つとなる。特にピエタスの英雄アエネアスを描いた、ウェルギリウス『アエネアス』など
- (3) Cornelius Tacitus, *Annales*. 以下、訳文の引用は国原吉之助訳の岩波文庫に拠る
- (4) François-Régis Chaumartin, ed., *Sénèque Tragédies III*, Paris: Les Belles Lettres, 2002, 3-13
- (5) アイスキュロス (『アガメムノン』), ソポクレス (『オ

- エディプス』, 『オエタ山上のヘルクレス』), エウリピデス (『狂えるヘルクレス』, 『トロイアの女たち』, 『フェニキアの女たち』, 『メデア』, 『パエドラ』). 『テュエステス』には現存する原作がないが、ソポクレスにもエウリピデスにも原作、関連作品があったこと知られている
- (6) 附表参照
- (7) 拙稿「セネカの悲劇『テュエステス』の pietas について」, 『西洋古典論集』11(1991)および、拙訳『テュエステス』(『セネカ悲劇集2』京都大学学術出版会1997)参照
- (8) 拙稿「ローマ文学の中の pietas の問題:『アエネイス』とセネカの悲劇『メデア』と『パエドラ』の問題」, 『甲子園大学紀要』24(1997)参照
- (9) C,D,N.Costa, ed., *Seneca Medea*, Oxford University Press, 1973, 155
- (10) 拙稿「セネカの悲劇『狂えるヘルクレース』における uirtus の変容」, 『西洋古典学研究』43(1995)参照. また、

- 『オエディプス』に関しては、拙稿「セネカ『オエディプス』の独創性 ピエタスをめぐって」、『比較文学年誌』51(2015) 参照
- (11) John G. Fitch, ed., *Seneca's Hercules Furens*, Ithaca, New York: Cornell University Press, 1987, 402
- (12) 注10の拙稿参照
- (13) 小川真正廣(訳)『狂えるヘルクレス』(『セネカ悲劇集1』京都大学学術出版会1997)の解説参照。また『オクタウィア』に関しては、小林標(訳)『オクタウィア』(『ユークロニア』4, 1974)の「訳者序」参照
- (14) Tacitus, *Annales*, 14.63
- (15) *Ibid.*, 14.60. Henry Furneaux, ed., *The Annals of Tacitus*, Oxford University Press, 1907, Vol. II, 307
- (16) *Annales.*, 14.61
- (17) *Octavia*, 593-645
- (18) 拙稿「セネカの悲劇『テュエステス』の pietas について」参照
- (19) Seneca, *Thyestes*, 176-335
- (20) Boyle, 107-108
- (21) *Octavia*, 614-618
- (22) Seneca, *Medea*, 911-915
- (23) 特に断らない場合は、『オクタウィア』の訳文は『セネカ悲劇集』2(京都大学学術出版会, 1997)の木村健二訳に拠る
- (24) Boyle, 112, 131
- (25) この韻律のみが「歌」において使われ、韻律の多様性を欠いているのは、『オエタ山上のヘルクレス』と『オクタウィア』の特徴で、両作品偽作説の有力な根拠となっている
- (26) 拙稿「セネカの悲劇『狂えるヘルクレス』における uirtus の変容」参照
- (27) *Octavia*, 58-64. Boyle, 114. Rolando Ferri, ed., *Octavia: A Play Attributed to Seneca*, Cambridge University Press, 2003, 145-147
- (28) *Annales*, 13.16. Furneaux, 173
- (29) 木村は「ローマの女たち」とし、フェッリは出自が明示されないローマ人たち、ボイルは2つの合唱隊を想定している、フィットマンは、オクタウィアの好意的な第1合唱隊と、ポッパエアに好意的な第2合唱隊と性格付けを明示して、2つの合唱隊を想定
- (30) Oxford Latin Dictionary 参照。Boyle, 131
- (31) 「勇気」 uirtus とする語が用いられている。Boyle, 237. Ferri, 315-318
- (32) 木村訳では「親衛隊長」、小林訳では「兵隊長」で、タキトゥス『年代記』に登場するティゲリヌスに同定されることが多い。ファエニウス・ルフスに特定する説もある。Boyle, 266. Ferri, 369-370. フェッリが詳細だが、ボイルはフェッリを踏まえている
- (33) hendiadys (ἐν δὶὰ δύοῖν)
- (34) Boyle, 275. Ferri, 384-385
- (35) ギリシア語形のプロロゴスを用いる。合唱隊歌はスタシモンとはしなかった
- (36) この箇所のみ拙訳
- (37) impietas は語としてはセネカ劇全体でも一か所のみ(『狂えるヘルクレス』97)の使用だが、その表す内容に関しては、頻出する。多くの場合インピエタスが齎す悲劇的結末と言っても良い。『オクタウィア』においては、impietas は431で用いられるが、主人公にインピエタスは全くと言って良いほど見られず、ネロのインピエタス故に、悲劇的結果が生じる。Boyle, 180. Ferri, 247. 形容詞形の impius はセネカ劇に複数回現れ、『オクタウィア』でも237, 363, 393, 598, 619, 850で使われている。なお、否定形ではない pius は270, 485, 504, 760で使われ、それぞれ重要な意味を担っているが、これらの意義については後日の課題とする
- (38) Tacitus, *Annales*, 12.67
- (39) セネカに常套的な主題
- (40) 木村は訳注で、タキトゥス『年代記』14.63を根拠に、「姦通」の罪が着せられることに言及している。ボイルもその可能性を指摘(121)、フェッリ(157)も詳細に論じている
- (41) オクタウィアとブリタニクスの母、メッサリナが、元首(皇帝)の妻のまま、ガイウス・シリウスとの「結婚」(matrimonium)を前提とした不倫関係に陥って、「結婚式」(nuptiarum sollemnia)を挙げ、それが放蕩者たちの究極の快楽(nouissima uoluptas)だったことはタキトゥスが証言している(*Annales*, 11.26)。紀元後48年のことで、それが主要な要因となって、メッサリナは殺される。*Octavia*, 260-269
- (42) *Octavia*, 593-645
- (43) Suetonius, Nero, 49.2
- (44) Seneca, *Thyestes*, 1-121. しかも、ここでは、ギリシアのエリニウスに対応する、ローマの復讐の女神フリアにそれを促されている
- (45) *Octavia*, 523-550. ここでネロが「愛の神」(Amor)の至高性に言及し、それが行動原理となって、ポッパエアへの愛を貫徹するために、オクタウィアを排除することを宣し、それをセネカがストア哲学者の立場から抑えよ

うとする。550の美のはかなさへの言及は『パエドラ』の合唱隊歌(773ff.)にも見られる。ネロの行動原理としての「愛」はこの場合「情欲」とほとんど同義であり、タキトゥスの描くネロの性格と共通している

(46) 「神を造った」とは、クラウディウスの死後の神格化を意味し、これについてはタキトゥス(Annales, 12.69)もスエトニウス(Claudius, 45)にも語られている。ネロが神格化されるクラウディウスに侮蔑的であったのは、小プリニウスの証言があり、セネカの戯作文『アオコロキュントシス』にも反映している。神を蔑むほどの傲慢さは、『オデュッセイア』のポリュペモス、『アエネイス』のメゼンティウスが思い起こされ、彼らの破滅もここでは知識として前提されていると思われるが、性格描写としてはやはり『テュエステス』のアトレウスに近いであろう

(47) Octavia, 443

(48) 『オクタウィア』107行の「罪」(scelus)への訳注で、木村は後に着せられる「姦通」の可能性を示唆している。crimen omni exitio gravius「どんな死よりも深刻な罪科」と言うタキトゥスの措辞は、『オクタウィア』同行で木村が「罪の汚名」と訳した語crimenと共通しており、108行には「姦通罪」を直接には指していないがpoena grauior nece「死よりも重い罰」という句も、タキトゥスの用語と似ている

(49) Tacitus, Annales, 14.64

(50) ネロがオクタウィア処刑に先立って排除した有力者プラウトゥス(ルベッリウス・プラウトゥス)とスッラ(ファウストゥス・コルネリウス・スッラ・フェリックス)の名が、作品中に言及されている(437-438)。Whitman, 84, Ferri, 252-253, Boyle, 184

(51) Octavia, 222-251

(52) 権力者アッピウス・クラウディウスの情欲から、娘ウィルギニアの名誉を守るため、父親が娘を殺し、アッピウスはそれが原因で失脚する。Livius, 1. 57-60

(53) 第6代ローマ王セルウィウス・トゥリウスの娘トゥリアは、第7代の王となるタルクィニウス・スペルブスの妻となり、父の死に関して不孝の振る舞いがあったとされる

(54) Tacitus, Annales, 15. 60-64

(55) この部分が、合唱隊を2つに分ける根拠となっているが、木村訳も小林訳もその立場はとっていない

(56) Octavia, 877-889. この合唱隊歌の結句「つましい家に満足して隠れて住む清貧こそよけれ、／高き館はしばしば暴風によって揺さぶられ、／あるいは運命の女神に

よって倒壊させられる」(896-898)はセネカ劇に常套的なテーマ

(57) 前注の「運命の女神」(木村訳)も「運の転変」を意味するfortunaの神格化で、セネカ劇に教訓を読み取るとすれば、「運の転変」に左右されない確固たる精神の確立ということであろうが、ここでは触れない

(58) Octavia, 595-597

(59) Ferri, 31-74,